

創造性って何だろう？

○創造性の定義

数十年以上にわたり、創造性の理論および教育の世界的なリーダーであったトーランス (Torrance, 1994) は創造性を、次のように定義しています。

「創造性は通常、過程あるいは産物、時としてある種のパーソナリティとか環境的な条件として定義されてきた。私は、創造性を問題を嗅ぎ付け、情報のギャップを見つけ出し、アイデアとか仮説を形成し、それらの仮説を検証したり修正したりして、最終的に結果をコミュニケーションする諸過程を指すものとして定義したい。創造性は斉一性 (conformity) の対局にあるものであり、オリジナルなアイデア、異なった視点、問題への新たな見方が強く関与する。このことから、斉一性が他者を混乱させたり困難に陥らせたりすることはないのに対し、創造性ではそれが起きる。創造性は未踏の領域へのアクセスであり、主なる潮流からの逸脱であり、古い鋳型を壊し、経験に対してオープンになり、次から次へとつながることであり、アイデアを再構成し、諸アイデアの間に関係を見出すことによって、成功が約束される。好奇心とか、イマジネーションとか、発見、革新とかいう概念は、創造性の議論の中心であり、時としてこれらの語は創造性と同義に用いられる。ある人は、適応の全ての行為は創造的な行動と見なされると主張するほどである。」

○自己実現の創造性って何？

教育における創造性に言及する時には、「自己実現の創造性」を欠かすことができません。マズロー (Maslow, 1954)によると、人は食物や水や睡眠等の生理的欲求とともに、愛情、安全、自尊等の基本的欲求を持ち、少なくともそれらの一部が満たされると、さらに高次の正義、善、美、秩序、統一などの成長欲求を叶えるべく行動するといえます。すなわち、どのような人であっても、自己の実現や完成に向けた積極的な意志と可能性を持っているのです。このような最高次の欲求を「自己実現の欲求」と称し、その欲求を満たすべく自己の成長を目指して行う諸々の行動を「自己実現の創造性」といいます。

○創造性の教育って？

学校場面の「創造性」と聞くと、みなさんは理科や数学や技術科での発見や発明、美術や国語での制作や創作を思い浮かべるでしょう。しかし、教育的な立場から創造性について言及する際には、創造性を限定的な場面でのみ使用することは適当ではありません。というのも、全ての児童生徒は知能同様に創造性も持っており、その子の持っている創造性をどう伸ばすかが教育の重要な目標になるからです。創造性の教育は、一人ひとりの児童生徒が持っている創造性に着目し、それを伸ばすことに力点が置かれます。様々な教科や教材を通して、他者と比較するのではなく、その子の持っている「個性」＝「その子らしさ」をどう伸ばすかという観点からの教育が望まれます。そのため、学校教育において創造性を育成すると言うときには、外部に作り出される産物のみではなく、その子の内面世界におけるその子らしさを発見し、それをよい方向に伸ばすための周囲の配慮が欠かせません。つまり、自己実現の創造性をいかに伸ばすかが問題となるのです。このことから、個性の育成が大切だとしながらも、児童生徒を集団として取り扱う傾向がある日本で創造性の教育を実施するには、創造性が何であるか理解するとともに、それを育成するための方略や技法を家庭や学校において根気強く実施する必要があります。

弓野憲一(2001) 「総合的学習の学力 測定と評価技法の開発」(明治図書)第1章より 引用・改定